

午後の街

黒ずんだアスファルトから空に向けて伸びる電柱の森
僕は見上げる

網のように張り巡らされた電線が
午後の空に埃っぽいヴェールをかぶせる

何ひとつ優れて繁栄するものはなく
均しく、平等に、地上の汚点しみの如く

夢幻を呼び醒ますひす歪みは見当たらない

うつ現を現としてしか映さぬ現在だけが

人々は歩くことをせず、移動する
全ゆるものにへばりつき、しがみつく

そして、それらをなぞり、記す者たち
存在し、かつ無であることを知るか

老いたものは人間だけではない
家々が、工場が、そして街全体が

この白っぽい世界に、僕は住んでいる
生活している

(2005.8.11)